

武智さんが求め続けた、 現実の反対概念としてのユートピア

吉岡 忍

高橋武智さんの晩年の著書に『日本思想におけるユートピア』（2014年、くろしお出版）がある。日本語を学び、日本研究を志す外国人学生に日本理解のための鍵を提示したテキストで、彼が60代から70代にかけての10年間、東欧スロベニアのリュブリャーナ大学で行なった講義がもとになっている。

本文では古事記、仏教信仰から安藤昌益、井上ひさしまでをひもとき、日本民衆が連綿と思いついてきたユートピア思想を論じ、世界思想史に極東の島国でくり広げられてきた営為を位置づけていくのだが、そ

の冒頭、武智さん（と呼んだほうが、私の実感に即している）はユートピアを「現実」に對する強烈な反対概念」だと定義し、なぜ私たちは「なおいつそう新しいユートピアを指向してやまないのでしょうか」と問いかけている。

これはほとんど武智さんがみずからの人生を振り返つての感懐ではないか、と私は読んだ。武智さんは18世紀フランスの無神論啓蒙思想家デイドロの研究からスタートし、この現実が違う、といつも思い、もつと別の可能性があるはずだ、と試行錯誤した人だった。口ごもり、おそらくときには失敗もし、軌道を修正しながら

もいつしよだった。その数カ月前、私や山口文憲（文筆家。新潮社刊『やってよかった東京五輪』オリピック熱1964）は戦後史解剖の快作）などが手足となつて走りまわった第1次ジャヤテック（JATEC）反戦脱走米兵支援日本技術委員会の略）の活動が米軍スパイの潜入によつて壊滅し、第2次ジャヤテックが発足した直後である。責任者となつた武智さんが、脱走兵を移動させ、匿うときの諸注意を聞きたい、と連絡してきたのだつた。

密談が終わつて、遅い夕食に出た。武智さんとは何度もベ平連の会議で顔を合わせてきたが、食事したのはそのときが初めてだった。油じみて、蛍光灯ばかりがまぶしい近所の中華料理屋に入った。武智さんはいきなり豚足を頼み、6つも7つも平らげた。遠藤も負けていなかった。晩年の姿からは想像もできないが、そのころ2人とも異様に太っていた。赤いデコラ張りのテーブル上に積み上がった骨の山を前に、私は「脱走兵と外食するときは、あんまり目立つた食い方をしないほうがいいよ」と、あきれながらアドバイスをしたことを覚えている。

69年春のベ平連は賑やかだった。定例的なデモ・集会のほかに新宿駅西口ではフォークゲリラの活動が始まり、「週刊ア



『日本思想におけるユートピア』
（くろしお出版 HP より）

も、「新しいユートピア」に賭けたその姿が私の目には焼きついている。猛烈に食べる人、というのが私の第一印象だった。1969年の春先だったと思う、武智さんが当時私が暮らしていた新宿区大久保の木造アパートに訪ねてきた。私とは同世代で、のちに福生市議となつた遠藤洋一（2017年逝去）

ンポ」も創刊した。私や山口がそちらで忙殺されていたあいだ、第2次ジャテックは北海道クナシリの漁船ルートを使えないまま、2人の脱走兵を匿い、どこに、どうやって逃亡させるべきか、あてのない活動を強いられていた。武智さんや、武智さんが組織した学生たちとときどき顔を合わせると、一様に暗い。この種の活動で詳細を聞きただすのは禁物だが、第2次ジャテックは地味に暗い、と私は感じていた。

しかし、のちに私たちは知ることになるのだが、このあと武智さんは立教大学助教授のポストを投げうってヨーロッパに飛び、ベトナム反戦や植民地解放に関わるさまざまなレベルの活動家たちを訪ね歩き、脱走兵を脱出させるために必要な書類のつくり方を探っていたのだ。端的にそれは、日本の空港から外国に飛び立たせるために必要となるパスポートの変造技術である。ナチスへの抵抗運動、仏植民地だったアルジェリア解放闘争などを通じ、ヨーロッパ、とくにパリには書類変造技術が蓄積されている。武智さんは必死に走りまわり、そうした地下組織の「芸術家」から手ほどきを受けることに成功する（この間の経緯は高橋武智著『私たちは、脱走アメリカ兵を越境

させた』作品社刊、2007年 に詳しい）。

ずつとあとになって、私は武智さんからその技術の一端を教わった。「入出国のゴム印をつくるんじゃないよ。爪楊枝、あの先で点を描き、線をつないでいっていかにもスタンプを押ししたように描くんだけ。本物を真似るより、本物らしく見せる、それがコツ」。そうやって日本の「芸術家」が変造したパスポートを持ち、2人の脱走兵は東京と大阪の空港から一般旅行者としてパリに向け、堂々と旅立っていった。

その話を聞いたとき、私は頭上の雲が晴れるような気がした。もちろんパスポートの変造は違法行為に決まっている。だが、それをいうなら、ベトナム戦争はどうなのだ。あらゆる戦争が大義をまとい、あちこち法律を貼り合わせて合法的に行なわれている。その「現実」に対して、それは違う、と考え、「現実」に対する強烈な反対概念とユートピアを思い描き、具体的に動くところこそが人間の証しではないのか。

極東の島国でひそかに行なわれていたジャテックの活動がようやく歴史の大河につながった、というのが私の思いだった。その水路を切り開いたのが武智さん——高橋武智さんだったことを、私は忘れない。

（よしおか・しのぶ／日本ペンクラブ会長）



高橋武智さん（左端）と本野義雄（右端）さんの傘寿を祝う会で、吉川勇一さん（中左）と福富節男さん（中右）と一緒に。